



日本の悠久の歴史をひもとけば、そこにはわが国を支えてきた「なでしこ」たちの存在があります。福岡の人気歴史家・白駒妃登美さんに、そんななでしこたちの知られざる歴史物語を紹介していただきます。

博多の歴女 **白駒妃登美**

男たちの志を次世代へ

——松陰を支えた女たち・杉滝と杉文②

✳幕末を生き抜いた文と素彦

前回は、あの吉田松陰の活躍の背景には母・滝の支えがあったというお話をしました。それは妹の文も同じで、特に十五歳で松陰の一番弟子ともいわれる久坂玄瑞と結婚してからは、松陰の志を遂げようと命を燃やす玄瑞を懸命に支えました。

松陰亡き後、玄瑞は尊王攘夷運動の急先鋒として京や江戸を駆け巡ります。そんな状況では満足な夫婦生活を送れるはずもなく、二人は手紙で意思疎通を図っていました。しかし幕末の動乱の中で、玄瑞は師・松陰の後を追うように亡くなってしまいました。玄瑞二十四歳、文二十二歳の時でした。六年半の結婚生活の中で、一緒に暮らしたのは二年にも満たなかったそうです。

それから二十年後の明治十六年、四十一歳になっていた文（美和子と改称）は、母・滝の勧めで群馬県令の榎取素彦（亡き姉の夫

のもとに嫁ぎます。その際、文が玄瑞の手紙を捨てられずに持参すると、素彦はそれを快く受け入れます。そして自らの手で玄瑞の遺墨を巻物に仕立て、「涙袖帖」と命名。きつと二人は袖に涙しつつ、玄瑞の手紙を読み返したのでしょう。切なさや優しさに溢れた、素敵なエピソードですね。こうして松陰や玄瑞の志を胸に、夫婦となった二人は明治の世を生きたのです。

✳文がつかないだ松陰の志

少し話はそれますが、ここでどうしても触れたいお話があります。それは、台湾の学校教育の礎となった六人の日本人「六士先生」のことです。明治二十七年、日清戦争で勝利した日本は台湾を割譲されますが、当時の台湾は、公教育もなければ、衛生環境も治安も悪く、世界で最も貧しい地域の一つでした。その台湾に対して日本が真っ

杉文 幕末の思想家である吉田松陰の妹。松陰門下の久坂玄瑞に嫁ぐが、22歳で未亡人に。(1843-1921) その後、長州藩主・毛利家の女中に。41歳で亡き姉の夫である榎取素彦と再婚した。

【イメージイラスト】アオジマイコ